論語的世界

小林秀雄

福武書店

詩人・宮沢賢治

小森一

福武書店

小林恭二（こばやし・きょうじ）
一九五七年、兵庫県西宮市に生まれる。東京大学文学部美学芸術学専修課程修了。八四年、「電話男」で第三回「海燕」新人文学賞受賞。大学在学中は「東大学生俳句会」の一員として活躍し、現在も俳句の形式美をとり入れた小説作品に取り組んでいる。著書として「電話男」「小説伝・純愛伝」「ゼウスガーデン衰亡史」「半島記・群島記」「実用青春俳句講座」がある。

荒野論

一九九一年三月九日　第一刷印刷
一九九一年三月一五日　第一刷発行

著者　小林恭二
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒102　電話(03)三二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七
本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本　小泉製本

（落・乱丁本はお取替えいたします）
（定価はカバーに表示してあります）

©K.Kobayashi 1991
Printed in Japan

ISBN4-8288-2375-1 C0093
NDC913 194 226p

目

次

荒野論　7
ゴブリン　31
記憶　71
夜景　93

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

六十有余年にわたってN氏をとりまき続けたきわめて粘着質の　115
霧について　145
斜線を引く　193
シャレーへ

装丁　平野甲賀

荒野論

荒野論

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

1

その昔、いまだ仏が王舎城におられた頃の話である。

あるところに五百人の盗賊がいた。

彼らは数を恃んで悪の限りを働いた。男と見れば殺し、女と見れば辱め、財と見れば掠め、家と見れば火を放った。

数歳を経ずして、その根城の百里四方は無人の荒野と化し、旅人は愚か、鳥さえも避けて通るようになった。

にもかかわらず彼らは悪事をなし続けた。彼らは遠い王城まで出張っていって略奪暴行を働いた。ゆえに印度亜大陸に彼らの悪名は轟きわたり、三歳のものをわきまえぬ子供でさえ、彼らの名を出されるとぴたりと泣き止むほどだった。

時にこの地方一帯を治める王は、大変情け深く心の寛い方であった。王は五百人の盗賊の跋扈ぶりにいたく心を悩まされ、ある日次のような布告を出された。

「かの五百人の盗賊たちを善導し、良民の道を歩ましえた者には、恩賞をとらせ、並びに大臣の

位を授けるであろう」
数日後、ひとりの力士が名乗り出た。力士は身の丈二メートル、体重百五十キロ、力は十人の壮漢と互角に綱引をできるほどだった。おまけに慈愛深い性格で学問も年老いた婆羅門にも劣らぬほど深く修めていた。
力士は名を難陀と言った。
難陀は王の前にまかり出ると「見事、盗賊を鎮めて見せましょう」と言った。
王は難陀の手をとって「宜しく頼む」と言った。
難陀は供廻りも連れず、即日荒野に出かけていった。
そしてあっという間に盗賊たちを感化して善良な人々に変えた。
ひとつには五百人の盗賊もようやく悪行に飽きて、平和な暮しを求めるようになっていたこともある。
彼らは長年の悪行の結果、ひとりひとりが億万長者となっていたし、日常生活においても、各地から拐してきた美女たちと満ち足りた時間を送っていた。更には、ようやく来世の報いを憂い始めていた。彼らも潮時を探っていたのである。
彼ら五百人の盗賊、いや、いまや五百人の善良なる人々は、難陀を徳とした。
だから、功成り名遂げた難陀が王国を追われた際も――王のもとに戻った難陀は、一旦は約束通り大臣の位に就いたが、ほどなく派閥抗争に敗れ、九族を獄に落とされた上、身ひとつで国を逃れていた。ちなみに派閥抗争を陰で糸引いたのは、難陀の人気に嫉妬したかの王であった――暖かく彼等の中に迎え入れ、客分として敬った。

五百人の善良な人々は、悪事から離れると猛然とセックスに励みだした。
何しろ他にすることがない上、回りには各地から略奪してきた美女が犇めいている。当然の成りゆきと言っていい。
五百人の善良な人々は日を経ずして五百匹の多淫なオットセイと化した。
ほどなく続々と二世たちが誕生し始めた。多い年には一万人もの赤ん坊が生まれた。

2

二十年が経過した。
その間、五百人の善良な人々は孜々と子作りに励み、彼らの根城は荒野の中の一個の国と化した。
国は繁栄した。
繁栄を支えたのは二世たちである。
二世たちはみな小心で勤勉だった。彼らは英雄的な親たちのため、年端も行かぬうちから大いに働いた。
五百人の善良な人々はすっかり年老いていたが、それでも好色ぶりは衰えなかった。彼らは財に飽かして次々と二世の娘たちを妻として娶った。
それでも温厚で小心な二世たちは文句も言わず、牛馬のようにただ働き続けた。

3

更に二十年が過ぎ去った。

さしもの五百人の善良なる人々も、寄る年波に勝てず、ようやく若い女性とのセックスがままならなくなった。

気持ちは若いつもりなのだが、体が言うことをきかないのだ。一世から生まれる子供はめっきり減った。

一方、温厚で小心な二世たちの中にもぽつぽつ女性と結婚する者が現れだした。こちらは当然のことながら、健康であるから子供がどんどん生まれる。

老いたる五百匹のオットセイたちはそれが気に入らなかった。

彼らにはどうにも自分たち以外のものの行う性行為が汚らわしいものに思えてならなかった。

彼らは次第にいらいらし始めた。

何故、自分たちにもままならない子作りをあの若造どもができるのだ。

やがて、一世の苛立ちは危機的に高まった。一世は息子の妻を召しあげたり、息子に夜通し仕事を命じたりして、二世たちの性行為を妨害しようとした。

にもかかわらず子供は生まれ続けた。

憤激した一世たちはある日集会を催し、断固二世たちの性行為を禁じる取り決めをしようとした。

しかし冷静に考えると、そうすれば子供が生まれなくなり国が滅びる。国が滅びれば、自分た

ちを祀ってくれる者がなくなる。自分たちを祀る者がなくなれば、来世どのようなものに輪廻するか分からない。しかし、だからといってこのままにしておくのも癪に障る。彼らはあれこれ知恵を絞った挙句、次のような申し合わせをした。

「われわれの国の今日あるのはまったくもってあの偉大な力士のお蔭である。この恩に報いるため、今後新たに娶る者は、新婦をまず力士に捧げることにしようではないか」

これはなかなかの名案のように思われた。

善は急げとばかりに、五百匹の老オットセイたちは、そのまま難陀のもとに赴いた。

そして長老格の者が言った。

「実はわたくしども合議の結果、これから新たに娶る者は、新婦をまずあなた様に献上する申し合わせをいたしました。言うまでもなくあなた様の恩に報いるためです。何卒、お受け下さるよう」

難陀は言った。

「そのようなことはするに及ばぬ」

「実はこれにはお礼の他にも理由があるのです。わたくしどもはあなた様に似た良い子を授かりたいのです。御存知の通り、今この国にあふれる二世どもは、親に似合わぬぼんくらばかり。わたくしどもが目をひからせている間はともかく、わたくしどもが死に絶え、ぼんくらとその子供ばかりになれば、国が滅びてしまうことは必定、そうなればわたくしどもを供養する者もいなくなり、ひいては、あなた様の偉大な業績も無に帰してしまいます。どうかお慈悲と思い、わたくしどもの勝手な願いを聞き届けてくださいまし」

まことに勝手な願いである。
難陀は再度断った。
しかし、五百匹の善良なる老オットセイはアウッ、アウッと甲高い声で叫びながら、玉乗りをしたり、輪投げをしたりして、一向にひきさがらない。難陀はとうとう根負けをしてこの申し出を受けることにした。
温厚で小心な二世たちがこの申し合わせに従ったのは言うまでもない。

4

二十年の歳月が流れた。
この国ではすでに三世が登場している。
三世は半分が難陀の子供で、あとの半分が二世の子供だった。
彼ら三世は、一世とも二世とも似ていなかった。
彼らはみな聡明で、美しい姿形をしていた。そして何よりも勝ち気だった。
彼らのうち最年長のものはすでに娶ったり娶られたりする年齢に達していた。
が、彼らにはどうにも新婦を力士に捧げる習慣が耐えられなかった。非人間的な感じがして。
彼らは様々に抗議の声をあげた。ある者は家の壁に自分の意見を書いた紙を貼り、またある者は抗議の歌を町中で歌った。しかし、その意見はいっかな取り上げられなかった。そもそもこの国の実権を握る一世たちは文盲で壁新聞の字も読めなかった上、耳も遠くなっていて抗議の歌も聞こえなかったのだ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.